ドクター井口のつぶやき　その㉛

夕暮れ

井口昭久

アルコール依存症患者に近いほどに私は酒を飲むが、昼間は飲まない。5時を過ぎてから家に帰ってビールを飲む習慣が40年近く続いている。冷蔵庫から缶ビールを出して一人で飲む。

子供たちが幼かった頃のマンションは玄関がリビングの入り口であった。リビングはお風呂の脱衣所も兼ねていた。冷蔵庫に余裕がなくて私のビールは冷蔵庫に入れてもらえなかった。

近くのココストアから運んでもらったケースに入った瓶ビールは、いつもベランダに置かれていた。ビールは夏には熱く、冬は冷たかった。春夏秋冬、その季節の気温でビールを飲んだ。夏には沸騰しそうなビールに氷を入れて飲んだ。子供たちは「ビールは氷で割って飲むものだ」と思っていたようだった。

次男が大学へ進学したころに女子大学の隣に住むようになった。家の隣が大学の敷地であり、斜面に雑木林がある。

私の家からは四季に変化する雑木林が見える。住まいに余裕のある家に住めるようになると、子供たちは家を出ていった。缶ビールを冷蔵庫に保存しておいても妻は無視してくれるようになった。

夕暮れ時に、部屋の向かいの雑木林を眺めながらビールを飲むのが習慣になった。

山桜が春の終わり頃に咲き、冬が近くなると紅葉する。四季折々に雑木林は変化するがビールはいつも冷えている。

雨が雑木林を濡らし、さわさわと迫ってくるような音を聞くと幸せになる。染まりかけている紅葉をしとしとと濡らして降る雨の音を聞くと、落ち着いた気分になる。

仕事を終えて、車を運転して家に帰るときは浮き浮きする。雨降りの予感がすると、私の車はビールに向かって走る。車輪は大地をつかみ、カーステレオのオールディーズの曲に乗って、アスファルトの道路を疾走する。

私は夕暮れ時に雑木林を見ながら酒を飲むために毎日生きている。

以上は、私がまだ酒を飲んでいた半年前までの話である。

私は、6カ月前に病気が発見されて、3カ月前に治った。酒が原因であったかどうか不明であるが、「酒が原因ではないということはない」、ことは確かであった。

退院するときに、酒は「ほどほどに」飲んでくださいと主治医に言われたが、横に座っていた妻が「この人のほどほど」は「ひどいほどほどだ」と言った。主治医が「それなら止めた方がいい」というような顔つきになったので、今はビールを止めている。

酒を止めてみると、今までアルコールのベールに覆われていた私の「こころ」が裸になった。

ビールの無い夕暮れは寂しくて、悲しくて、人恋しい時間だ。この原稿を書いている今は秋の夕暮れで雨が冷たそうに雑木林に降っている。ただそれだけだ。

（愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授）